

No. 1149

海洋博閉幕

沖縄の本部半島を舞台に183日間にわたってくりひろげられた海の祭典国際海洋博覧会。期間中348万人の人々が訪れ沖縄の海にふれた。

しかし入場者はふるわず、当初の予定を100万人も下廻り、会場周辺のみやげ物屋やホテルの倒産が相次ぐなど暗い一面もみられた。様々な論議を投げかけた沖縄海洋博覧会も1月18日その幕を閉じた。ポートサイドシャッターで閉会式は開かれた。三木総理大臣は海に親しみ海を学び海について考える機会として少なからず海洋博覧会は貢献しえたものと確信するとあいさつ。南の海と空にひるがえった博覧会旗が静かにおろされ、高瀬日本政府代表から博覧会国際事務局のトレンドル議長に返還された。

36ヶ国3国際機関1自治領が参加、女性の太平洋ヨット横断記録やヤップのカヌーでの参加など海の博覧会にふさわしいトピックスも生んだ。

沖縄の海と心を舞台に世界ではじめて、海ととり組んだ海洋博覧会。会場の“かりゆしの海”跡地は海洋記念公園として存続される。

庵主は有髪女性

— 東京・秋川 —

武蔵野の静かなたたずまいが残る、秋川その奥深い雑木林の中に現代の駆け込み寺と言われる禅庵があるという。長年、住む人もなく廃寺同然だったこの寺に、いつの頃からか、庵主がひとり、禅の境地を求めて、修行を続けている。工藤智光さんがその人だ有髪の庵主としてこの寺に入り、自らの修行とささやかな禅道場を開く。

工藤さんは禅の道を志したのは大学時代に「人生とは何か」という問題に直面したのがその動機だった。

京都、南禅寺の門をたゞき、柴山全慶老師に師事し、老師が世を去るまで20年間、禅の修行に打ち込んだ。

老師の「参禅修行は所謂、畳の上の水練に過ぎない」のことばにこの慈眼寺に入ることになったという。

参禅した人は今までに百余名に達する。ここを訪れる人は、家庭の悩み、学問の意義、そのほか、種々な悩みを抱え、訪れる場合が多いという。

世相の反映でもあろうか、女性にとっては駆け込み寺的な役割を果たしている様だ。今日も何人かが無我の境地を求めて禅に没頭している。張り詰めたというより、湿っとりとした、人の心を育む様な空気が参禅者たちをつつむ。

「形にとらわれず、自由に禅の境地に生きたい」という工藤智光庵主、禅一筋に生きる1人の女性の姿がそこにある。